

(3) 全体計画

課題	技術開発、調査等の概要	12	13	14	15	16	到達目標
1. 種苗生産 技術開発							
親ウニ養成	養成サイズ、期間、飼育水温等を変え、周年安定採卵を試みる。	◎	◎	○	○	○	周年・安定採卵。
幼生飼育	精密濾過水、流水紫外線殺菌灯、抗生剤等の使用、適餌料検討、及び可変式回転翼の使用による生残率の向上。	◎	◎	◎	◎	◎	八腕後期幼生率 50%以上の安定生産。
変態率向上	後期幼生の飼育手法の検討。塩化カリウム、チロキシン等の使用方法の検討。	◎	◎	◎	◎	◎	変態率 50%以上。 健苗生産。
稚ウニ養成	精密濾過水等の飼育水処理の検討。餌料の検討。殺菌手法の検討。剥離法の検討。	◎	◎	○	○	○	生残率 50%以上。
中間育成	稚ウニ水槽での継続飼育等飼育方法、疾病対策、配合餌料等の餌料の検討。	◎	◎	○	○	○	生残率 80%以上。 1 cm種苗 50 万個生産。
2. 放流技術 開発							
放流方法の 検討	1 試験区、5 千～1 万個程度の放流試験を行い、放流環境・放流サイズ・放流時期等の検討を行う。	◎	◎	◎	◎	◎	放流後の生残率 10%以上を目指す。
放流効果の 推定	毎年 1 万個程度の稚ウニに ALC 標識をつけ、漁獲されたウニの口器を回収して、回収率を推定する。	○	○	◎	◎	◎	口器による調査 率 10%を目指す。
食害の実態 把握	放流地周辺での食害動物調査、水槽での食害試験を行い、食害種・食害量・被食サイズを明らかにする。	—	◎	◎	—	—	放流方法(放流環境・放流サイズ等)を決定する際の重要資料となる。
3. 関連調査							
資源量の推定	漁期前と漁期後に漁場周辺海域で生息密度調査を行い、ウニ資源量を推定する。	◎	◎	◎	◎	◎	ウニ資源量とその利用実態をモニタリングする。
稚ウニの生態解明	稚ウニの生息環境・出現時期・成長を明らかにする。	◎	◎	○	—	—	放流環境・放流サイズ・放流時期の参考資料とする。
漁業実態把握	ウニの生殖腺重量調査・セリ帳集計・口器中間骨測定を行い、漁獲個数・漁獲サイズを推定する。	◎	◎	○	○	○	調査海域での漁獲個数のモニタリングをする。